

(表紙)

ゴ  
ロ  
ゴ  
ロ  
お  
に  
ぎ  
り  
り

さく・え おかやまたかあき

赤井さんの畑では、今年もたくさんトマトがとれました。

その中に仲良しの兄弟がいました。

弟思いのトマキチと、お兄ちゃんが大好きなトマオです。

今日は、トマトたちの旅立ちの日です。

トマキチとトマオも、スーパーで売られることになりました。

トマオとトマキチは、ベルトコンベヤーの上に  
乗せられると、ゴロゴロ転がりながら運ばれていきます。

これは、トマトに傷がないか、きれいな色をして  
いるかを調べるためです。

「ゴロゴロゴロゴロ楽しいな」

トマオは、転がるのが得意です。

「トマオ、ゴロゴロ鬼ごっこだ！」

もっと早くころがらないと捕まえちゃうぞ！」

「わーい、兄ちゃんこっちこっち」

ところが、途中の分かれ道で、二人は離ればなれになっ  
てしまいました。

「兄ちゃんどこに行くの？」

「あれれ、おかしいな」

「兄ちゃんこっちだよ。こっちに来てよ」

二人はいったいどうなるのでしょうか。

しばらくゴロゴロ転がっていくと・・・

トマオは、スーパーに行く段ボール箱に入れられました。

一方のトマキチは、不良品と書かれた青いバケツにポイッと捨てられてしまいました。

「兄ちゃーん！」

「トマオー！ここでお別れだ。おいしく食べてもらうんだぞ。」

「いやだ！いやだよ 兄ちゃん！」

仲の良かった二人は、離ればなれになってしまいました。

そして、トマオはスーパー行きのトラックに乗せられました。

スーパーに着いたトマオは、さっそく他のトマト達と一緒に、棚にきれいに並べられました。

今日はトマトの特売日です。

仲間のトマト達は、自分を買ってもらおうと、はりきっています。

でも、トマオはそんな気分にはなれませんでした。

「僕より兄ちゃんのほうが立派なトマトなのに。味だって僕よりずっとおいしいはずなのにどうして……」

トマオは、一人泣いていました。

じつは、トマキチには小さなキズがあつたのです。

そのキズは、畑でいじめられていたトマオを  
助けたときにできたものです。

ほんの小さな、じーつとよく見ないとわからない  
ぐらい小さなキズです。

でも、少しでもキズがあると、  
お店では売ってもらえないのです。

トマオもトマキチも、そんなことは知りませんでした。

「まあ、おいしそうなトマトだこと」

トマオの目の前に、やさしそうなおばさんが  
やってきました。

そして、おばさんはトマオを手に取りました。

「ぼく、兄ちゃんに分までおいしく食べてもらおうからね」

そういうとトマオは、おばさんの持っていたカゴに  
もぐりこみました。

トマオは売れたのです。

「本当はトマキチ兄ちゃんと一緒に売れたかったのに」  
トマオは心の中でそう思っていました。



おばさんの家にやってきたトマオは、冷蔵庫の中に入れてられました。

「ヒンヤリして気持ち良いな。でも真っ暗で少し怖いな」

トマオは、初めての冷蔵庫にすぐくドキドキ、すこしワクワクしています。

でも、トマオはトマキチのことを思うと、

またまた涙がポロリ。

次の日も、さらにその次の日も、トマオはトマキチと一緒にあった楽しかった毎日のことを思い出していました。

「兄ちゃん今頃どうしてるのかな・・・」

そして、ある日の夕方、冷蔵庫がガチャツと開きました。するとそこには・・・

知らないジュースの缶がいました。

「こんにちは、今日からよろしくね」

トマオは缶に挨拶をしました。

「トマオ！ トマオじゃないか！」

缶はトマオを知っているようでした。

「その声はトマキチ兄ちゃん！ どうしてそんなかっこうしてるの？」

「兄ちゃんトマトジュースになったんだよ。いとこのトマミと、となりの畑のトマジロウは、ケチャップになったんだぜ」

「良かった。捨てられたわけじゃなかったんだね」

嬉しさのあまりトマキチの近くに行こうとしたトマオは  
冷蔵庫からコロリ。

同じようにトマオの近くに行こうとしたトマキチも  
おばさんの手からスルリと落ちました。

冷蔵庫から落ちたトマオは、床をゴロゴロ転がっていきました。

おばさんの手から落ちたトマキチも、

トマオのあとをゴロゴロ転がっていきました。

「わーい、ゴロゴロ鬼ごっこだ。兄ちゃんこっこっこ」

「待て待てー！ 今度こそつかまえてやるぞー！」

「やっぱり兄ちゃんといっしょだと楽しいな」

おしまい。